

中川五郎治の見たシベリア諸民族

著者	加藤 九祚
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	1
号	1
ページ	152-158
発行年	1976-03-15
URL	http://doi.org/10.15021/00004663

中川五郎治の見たシベリア諸民族

加 藤 九 祚*

江戸時代にシベリア大陸の事情を自らの観察によって日本につたえた人としては、伊勢出身の大黒屋光太夫（1792年帰国）、仙台の津太夫（1804年帰国）、間宮林蔵（1809年）、中川五郎治（1812年帰国）および安芸国川尻浦の久蔵（1813年帰国）の5人（グループ）のみである。このうち光太夫、津太夫、久蔵の3人は暴風のためにシベリアの地に漂着したものであるが、なかでも光太夫は自らのすぐれた観察眼と非凡な記憶力によって、桂川甫周というよき協力者とあいまって、不朽の名著『北槎聞略』を残すことができた。本書は18世紀来のシベリアやロシアの事情を示す資料としてソ連でも高く評価され、故コンスタンチノフによる翻訳出版が予定されている。

つぎの津太夫一行の見聞は大槻玄沢という当代屈指の碩学の努力によって『環海異聞』にまとめられ、昭和19年に大友喜作編「北門叢書」第4冊として刊行されている。つぎの間宮林蔵は江戸時代に自らの意志によって大陸に渡った唯一の人であり、その観察は『東槎紀行』および『北蝦夷図説』として広く世に知られている。これらの書物はシーボルトという大学者の手でドイツ語に訳され、世界の学界に裨益するところが大きかった。安芸の久蔵の見聞記『魯齊亜国漂流聞

書』も木崎良平、加藤政信両氏によって紹介されたが、とくに木崎氏は『鹿兒島大学史録』第4号（1971年）にその復刻・解説を発表している。

中川五郎治のことは、最近、吉村昭『北天の星』〔吉村、1975〕によって全国的に知られつつあるが、その見聞記は『口書』が『通航一覽』巻309に収められているだけで、それ以外の『五郎治申上荒増』、『異境雑話』、『外国紀聞』などは国立公文書館、早稲田大学図書館、函館図書館に写本のまま残されている。

私はかねてから中川五郎治のことを、シベリアからロシア語の種痘書を持ち帰った人として知っていたが、作家吉村昭氏に啓発されて前掲の見聞記に接する機会を得、彼がシャンタル諸島やウッドスコエ柵など、珍しい土地に足跡を印しているだけでなく、シベリアの諸民族の生活についても透徹した観察を残していることに驚いたのである。そこで、主として函館図書館蔵の写本『異境雑話』によってその一端を紹介しようと思う。

五郎治は陸奥国下北郡川内村の漁民の子として生れ、エトロフ島番所の帳役をつとめていた1807年(文化4)4月25日、ロシア領アメリカ会社（露米会社）に属するロシアの海軍士官ダヴィドフらのために不法に捕えられ、オホーツクに連行

* 国立民族学博物館第1研究部

された。彼はオホーツクから2度逃亡を試み、アムール河口の北方にあるシヤンタル諸島、ウダ河下流部にあるロシアの拠点ウツスコエ柵などを放浪し、ヤクーツク経由イルクーツクに至り、1812年（文化9）10月15日松前に帰着したものである。したがって五郎治の視野では、ウダ河やオホータ河流域に漂泊するトナカイ遊牧民、北方ツングース（今のエヴェンキ族、エヴェン族）とヤクート族が大きな比重をしめている。とくに大陸部の北方ツングース族についての五郎治の観察は日本のシベリア文献中でもユニークであり、ソ連の学者にもぜひ知ってもらいたいものである。

1. ツングース

五郎治は、ツングースがトナカイに乗るときの状況をつぎのように書いている。「鹿（オレニ、一名サハタ）、毛色種々にして白きもの斑なるもの、灰色のものもあり。腹多く白し。トングシ[ツングースのこと——加藤註]、之に乗るには左足をオレニの尻の上へ掛け、鞍壺へ飛乗る也。予等乗るに、トングシの膝を台にし、夫江足を掛け乗馬の如く鞍へ力を入れれば、鞍鞣（ひっくりかへ）る也。トングシ、鹿に乗るには右よりす。魯西亜にて馬に乗るには皆左方よりす。故に左よりするものはトングシ也とて大いに笑ふ……」。

この観察は実に重要であって、現在ソ連、さらには世界の学界で論議をよんでいる問題につながっている。すなわち、ユーラシアにおけるトナカイ飼養の起源に関する問題である。かつてシレリウス、シュミット、コッパース、ボゴラズ、マル、フロル、キセリョフらの学者

たちはトナカイ飼養こそが牧畜の最古の形態であると考えた。中にはその起源が旧石器時代にさかのぼるとする学者もある。これにたいし、ハーン、ラウファー、ハット、ワシレヴィチ、レーヴィン、トルストフ、ワインシュテインらは、トナカイ飼養は馬飼養の後に、その影響のもとに発達したと考える [Вайнштейн, 1972: pp. 100-101]。現在では後者の方が多くの支持者を得ているようである。

もう一つの問題、トナカイ飼養の原郷はどこか、それは一つであるか、それとも複数であるかについても多くの議論がある。リップルトはスカンジナビアに、ハーンはシベリアに、ラウファー、ハット、フロル、ボゴラズらはシベリアのサヤン・アルタイ地方に原郷を求めている。ウィクルント、ゾロタレフらはその原郷が数箇所であると主張した。そしてソ連の著名なシベリア民族学者レーヴィンとワシレヴィチは、その原郷はシベリアであるが、サヤン地方とザバイカル地方の2箇所別々に発生し、サヤン型はチュルク族の馬飼養、ザバイカル（シベリア）型はモンゴル族の馬飼養の影響のもとに発生したとのべている [Василевич и Левин, 1951]。

ワインシュテインはユーラシアにおけるトナカイ飼養のタイプを5つに分類している。1) ラップ型（トナカイに荷物を積む、橇、乳しぼりあり、犬とともに放牧、^{おとり}罔のトナカイの利用）。2) 西シベリアまたはサモディ型（橇の利用、罔トナカイ、放牧用の犬はあるが、乳しぼりはない）。3) ツングース（シベリア）型（荷駄・乗用。乗用のときには鞍を使うが、鐙なし。部分的に橇も利用。罔、乳しぼ

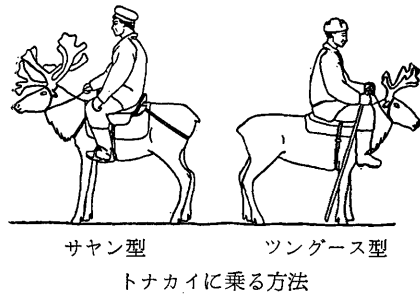
りあり。放牧用の犬なし)。4) 北東型(橇用, 罔トナカイの利用。放牧用の犬なし)。5) サヤン型(乗用の鞍をともなう荷駄・乗用, 乳しぼり。放牧用の犬と罔トナカイは利用されない) [Вайнштейн, 1972 : p. 102]。

ところでサヤン型の場合には, 馬用の鞍によく似た固い鞍を利用し, 鐙をつけ, 乗るときには馬に乗るときと同じように左から乗る。これにたいし, ツングース型(エヴェン族, エヴェンキ族, オロチ族, トナカイ・ヤクート族, ドルガン族など)は, 鐙を利用せず, 乗るとき右から乗る。鞍もやわらかい枕のようなものを使い, 右手に杖をついている。

ここで, ツングースが右側から乗ることは大きな特徴であるが, これがモンゴル族の乗馬の風習に由来しているという理由がはっきりしない。モンゴル族にしても, 馬に乗るときは左から乗ったことが明らかにされている。最近, ソ連の民族学者ワインシュテインは, ユーラシアにおけるトナカイ飼養の原郷がサヤン・アルタイ地方であるとのべ, ツングースの右乗りの理由をつぎのように説明している。「ツングース諸族の場合には, 乗用のトナカイはサヤンのものよりも弱く, しかも乗っているとき, ほとんど常時杖を利用した。ところが, 杖は多くの場合右手で持つのが好都合であるから, 右からの方が乗りやすかった。右乗りはやがてしだいにツングース型のトナカイ飼養にとって伝統となったのである」 [Вайнштейн, 1972 : p. 119]。

ワインシュテインのこの説明も, もうひとつ納得がいかない。しかしいづれにしても, 19世紀の初頭における中川五郎

治の観察は, 歴史民族学上, きわめて重要な意味をもっていることに変わりはない。五郎治は, トナカイに一日乗った後「宿に着すれば皆放ち遣る也。其時, 鹿, 雪中に鼻を差入, 嗅ぐ。而してモーハという苔の在所を自ら掘て之を喰ふ。飼葉の世話する事もなき也」と書いている。またトナカイは「夏は青草を喰ふ。人の小便を至て好む, 若し人, 途中にて尿すれば, 此鹿, 荷を駄し人を載せながら争ひ集って嘗む。……[トナカイの]腹の上には乗らず, 前足の上方に小き鞍体の物を置き, 皮の腹帯一筋かけて乗る也。鞍持ち至て悪しく, 初て乗時には隙なく落つる故, 左手に綱を取り, 右手に雪杖を持て乗る也」。



ここでも五郎治の細かい観察が目される。すなわちツングースがトナカイの腹の上ではなく, 前足の上, つまり肩胛骨の上に鞍をおき, 腹帯だけで固定して乗ることである。サヤン型の場合には, これとちがって, トナカイの腹の上に鞍をおいて, 腹帯だけでなく, 胸と尻に帯をかけ, 鐙をつけて乗るのである [Левин и Потапов, 1961 : p. 24]。

犬橇について 五郎治はツングースの犬橇利用についても貴重な情報を提供している。ツングースは一般に, 犬橇では

なくトナカイ橇を利用したが、五郎治の観察した19世紀初頭、オホーツク海岸の一部のツングースが冬期犬橇を利用したことをつたえている。五郎治はつぎのようにのべている。

「犬に牽かす事はカムチャッカよりヲホツカ迄なり、冬期然り、是トングシがカムチャダアリ土人の真似をしてヲホツカよりカムチャッカに至るに抛る。ヤコーツカより以西は曾てなし。ヤコーツカは皆鞆丸を抜ける馬（又牛）を用ゆ。犬も猫も鞆丸抜けるは善し、猫はむく猫となって見事也。

図（五頭の犬一橇の牽き、橇上、舟形のもの縦にあり、人、鞭を把て之に乗る）。

橇をサニケという。一、二人近辺を乗廻るに用ふ。五犬之を牽く荷を載するをナリタという。平目に長し。汲水採薪途上皆此ナリタを用る。犬は七、八頭より十二頭に及ぶあり、九月中旬より四月中旬迄は犬を空しく繋留飼養す。犬一頭一日鮭一尾を以て飼う、鱒は二尾に上る。此故にヲホーツカ、カムチャッカ辺、魚類沢山なる所にては犬を用ゆる也。魚類の不足なる所にては叶はず」。

以上の記述の中にきわめて重要なデータがいくつも含まれている。第1に、ツングースがカムチャダールの真似をしたことの指摘である。そして、鞭をもって犬を制御したことから見ると、この乗り方は明らかに「チュクチ・カムチャッカ型」であった。レーヴィンは北方ユーラシアにおける犬橇のタイプを5つに分類している。すなわち東部シベリア型、アムール・サハリン型、チュクチ・カムチャッカ型、西シベリア型、北西型である。

このうち、鞭をもって犬を御したのはチュクチ・カムチャッカ型だけであり、19世紀中頃にはすでに利用されなくなった[Левин и Потапов, 1961 : p. 62]。五郎治の時代にはまだこの型が用いられていたのである。

つぎに、犬橇の使用は漁撈による飼料の充足と密接に関連していることの指摘である。人ははじめ人力で橇を引いたにちがいない。その後、シベリアの狩猟・漁撈民の中から、海岸や河岸に定住して海獣猟や河川漁撈に従事する住民が出現するに至り、飼料が十分に確保されるようになった。犬橇用の犬の飼養はまさにこの結果であることは、今や民族学者たちの定説となっている。五郎治はいち早く、自らの観察によってこれを指摘している。

また五郎治がのべているように、チュクチ・カムチャッカ型、アムール・サハリン型および西シベリア型の犬橇が年代的に東部シベリア型より古いことは、レーヴィンらの詳細な研究によって証明されている。

2. ヤクート族

五郎治はヤクート族の生活についても、『北樞聞略』に劣らない、あるいは問題によってはより正確に書いている。まず住居について。「其家は皆、牛の糞にて四壁を塗り、冬季の住居とす。其臭き事忍ぶべからず。窓は氷を四角に切て外より窓に当て、四方能く雪を以て詰め、之に水を灑ぎ、忽にして氷附かしむ。臥時は内より蓋をなし、火にて解けざる様になす也。火床の制は、魯西亜人とは異なり、トロバ[ロシヤ語で煙突の意——加藤]というものにて昼夜焚火す。即、

家の中央に之を立て、三方には長板にて広く棚を釣りにて腰掛となし、寝る時はこの棚に寝ぬ。内は凡て土間なり。……牛糞にて家を塗るには、毎朝、前夜よりたる糞を籠にて持出し、見計ひ之を塗る。其時氷附て石の如くなる也」。なお、写本にはトロバの図が描かれ、「皆土にて塗る、下組は木也」と説明がつけられている。

セロシェフスキーの大著によると、この住居はヤクート族によってバラガンとよばれているもので、四壁ははじめ粘土だけで塗られ、その上から牛糞と粘土を半々にしたものを塗る。窓には、夏季魚の浮袋、雲母、毛でつくった網などが張られるが、冬は厚い氷でおおわれる。炬〔五郎治のいう火床〕は細丸太を煙突の形に結び合せたもので、その内側には厚く粘土がぬらされている。バラガンの内側は煙突を中心にして、壁ぞいに3方に板床がつくりつけられる。板床はオロンとよばれる。セロシェフスキーの書物に見えるバラガンの図には五郎治の図と全く同じ煙突が描かれている〔СЕРОШЕВСКИЙ, 1896: p. 352〕。五郎治は全体として図面が驚くほど上手である。

ここで興味深いのは、五郎治がヤクート族の住居をほめていることである。ふつうに考えると、ロシア式のペーチカの方がより文明的であると考へがちであるが、五郎治は逆の感想をのべている。彼は、「魯西亜人のペーチは陰気にて気重く悪しきも、ヤコーテのトロバは気晴れて甚我々の性に協ふ」と書いている。

つぎにヤクート族の食物について。「二葉松の皮を夏批きて上なる荒皮を去り、其甘皮を、恰も昆布を乾す如く火棚

に掛け乾して、牛糞白にて搗き、粉となし、之を其麦粉に和し、牛乳にて煮て糊の如くなし、籠にて嚼る也。其乾したる松皮をのみ取食うに昆布を食うが如し。ヤコーテは好んで馬肉を食う。又乳をも絞りに飲む也」。

セロシェフスキーによると、ヤクート族の第1の食糧は乳製品で、つぎが甘皮と粉のまぜたもの、さまさまの草根であった。甘皮としては松が上等とされ、落葉松は劣るとされた。ふつう夏または春のはじめ、若い松の外皮をていねいにはぎ、まるいナイフで甘皮をはぎとる。これを細かく刻んで煮こんでから松脂を抜き、ブトッカス（麦粉と木の実、草根をまぜた水っぽい粥）に入れて食べたり、非常食用に乾燥して貯蔵した。セロシェフスキーは、甘皮が「貧しい人の食物である」と書き、検探家マークの報告によって、1859年ヴィリュイ郡のヤクート族の家族で年間10—100プード〔1プードは16.38キログラム〕に達したことをつたえている。しかしセロシェフスキーの時代には、貧しい人でもしだいにこれを食べなくなったという〔СЕРОШЕВСКИЙ, 1896: p. 318〕。『北槎聞略』では、「松の木のあま皮を搗き、粉となし、麦の粉を少し加へて餅に造り食う」となっている。また「牛糞白」というのは、『北槎聞略』では、「冬の間は桶の内に牛の糞を厚く塗、その上に幾度も水を灌ぎ、堅く冰たる時に白となし」となっている〔亀井高孝校訂, 1937: p. 76〕。

乳のしぼり方 五郎治はヤクート族〔と思われる〕の乳のしぼり方を生々と描写している。「牛の乳を取には朝晩二度取也。児を産たる牛を、児をば内に繋置、

朝一度女牛の乳を絞って野へ追い遣る。晩方、乳の溜たる時其牛独り内へ帰る也。其時繫置たる牛の兎を引行て二口三口吸せて無理無体に脇へ引行て繫置、其跡の乳を不残絞り取て後に兎牛に預置也。兎牛乳を吸い、能き加減の時又脇へ引行繫置也。一向兎牛に吸はせざれば、乳出ざる由をいう也。此故に兎牛瘦せて目も当てられず。草を喰ひたる牛は格別、未だ草を喰はざる兎牛も右之如くする也。

セロシェフスキーによると、仔牛が生まれると、最初の一昼夜は飢えさせ、2日目にいくらか母乳を吸わせ、それ以後はもはや永久に母乳をたっぷり吸わせてもらうことはない。つねに乳房に口をつけるだけで、「無理無体に脇へ引行」かれたり、わずかな残り乳をもらうだけである。つまり人が指でしぼっても乳が出なくなると、仔牛に吸わせた。もし仔牛が死ぬと、その毛皮を他の仔牛にかぶせて母牛に近づけたり、他の仔牛に塩をつけて母牛になめさせたりして慣らした。乳しぼりのとき母牛がなにかの理由でいやがると、生殖器に空気を入れたり、くすぐったり、はては膣内に手を入れて子宮にさわったりして、刺戟して乳を出させた。貧乏なヤクートはほとんど乳しぼりのたびにこれをくり返した [СЕРОШЕВСКИЙ, 1896 : p. 160]。

婚資と妻の数について ヤクート族の婚資(カリム)の額については、日本人では五郎治だけがつたえている。「女を娶るには牛馬五、六疋、又十四、五疋、又五、六十疋を分にに応じて出て娶る也。……事に寄りては価を掛けて娶るもありと聞ゆ」とのべている。

セロシェフスキーが調査したのは五郎治の約70年後であるが、婚資の額が数ルーブルから数百ルーブルまでさまざまであったこと、ふつう100ルーブル程度であったとのべている。コリマ地方のある貧しいヤクート青年は牛10頭を親戚から借りて婚資として嫁の両親に支払ったと伝えている [СЕРОШЕВСКИЙ, 1896 : pp. 545—551]。

また一夫多妻については、「富有なるヤコーテは牛馬四、五百其余を持てり。之を一所に置ては飼料に差支うる故に所々に間配りして養ふ。其所毎に女房五人も七人もあると言へり」とつたえている。『北槎聞略』では、「妻は十四、五人より廿五、六人まで娶る。もつとも貧富によって多少あり、皆十二、三歳より養育しおきて妻となす」となっている。

五郎治の言う「其所毎に女房五人も七人も」という意味が、それぞれの場所ごとということであれば、『北槎聞略』と同じように14、5人から25、6人ということになるが、これはセロシェフスキーその他多くの資料と比べていかにも多すぎる。セロシェフスキーは、多くて数人と書いている。女性が12、3歳から嫁すことはシベリアの諸民族に通有の現象であった。

なお、五郎治の記述の順序や内容、あるいは光太夫の名をあげて言及しているところから判断して、五郎治自身または五郎治から聞き取った人は、『北槎聞略』の内容をよく知っていたと考えられる。

以上、五郎治の見たツングースとヤクート族の生活の一端を紹介したが、五郎治だけがつたえる民族学的資料は豊富であり、その価値は高いと思われる。

江戸時代の貧しい一漁民の子がこれだけすぐれた観察，さらには分析をして，しかもそれを書き残していることは驚嘆に価する。例えば第二次世界大戦後多くの教育のある日本人がシベリアに抑留されたが，この五郎治の観察と記録にまさるものを残した人ははたして何人いるだろうか。

信頼できる写本の校訂，研究の出版が期待される。

文 献

- ВАСИЛЕВИЧ, Г. М., ЛЕВИН, М. Г., 1951, Типы оленеводства и их происхождение. Советская этнография, 1951, No.1.
- ВАЙНШТЕЙН, С. И., 1972, Историческая этнография Тувинцев, Москва.
- 亀井高孝校訂, 1937, 『北槎聞略』三秀舎東京。
- ЛЕВИН, М. Г., ПОТАПОВ, Л. П., 1961, Историко-этнографический Атлас Сибири, Москва-Ленинград.
- СЕРОШЕВСКИЙ, В. Л., 1896, Якуты. Опыт этнографического исследования, С.-Петербург.
- 吉村 昭, 1975, 『北天の星』(上・下) 講談社。